

他我身のこゝろ

全部六冊
合本 野村



遠 13
1.690



1692



孔^わ奈^な美^み深^ふま子^こ太^た身^み姑^こう^うを^を吹^ふハ
 身^みら^らり^りほ^ほり^りま^まを^を高^{たか}る^るを^をく^く指^さ
 ぶ^ぶら^らる^るを^を以^もて^てや^やら^らる^る者^{もの}は^は月^{つき}を^を
 指^さぎ^ぎひ^ひら^らり^りを^を忘^{わす}れた^たら^ら山^{やま}を^を
 山^{やま}ど^どら^らか^かも^もろ^ろも^もや^やら^らる^る者^{もの}は^は
 ひ^ひら^らる^るも^もれ^れる^る者^{もの}は^は也^{なり}



他教書の目録第一

- 一 海内経緯の目録の事
- 二 儒佛の事
- 三 作の事
- 四 悪事千重の事
- 五 入るの事
- 六 へらぐん人の事
- 七 論語の事
- 八 一文の事
- 九 舟の事
- 十 小智の事

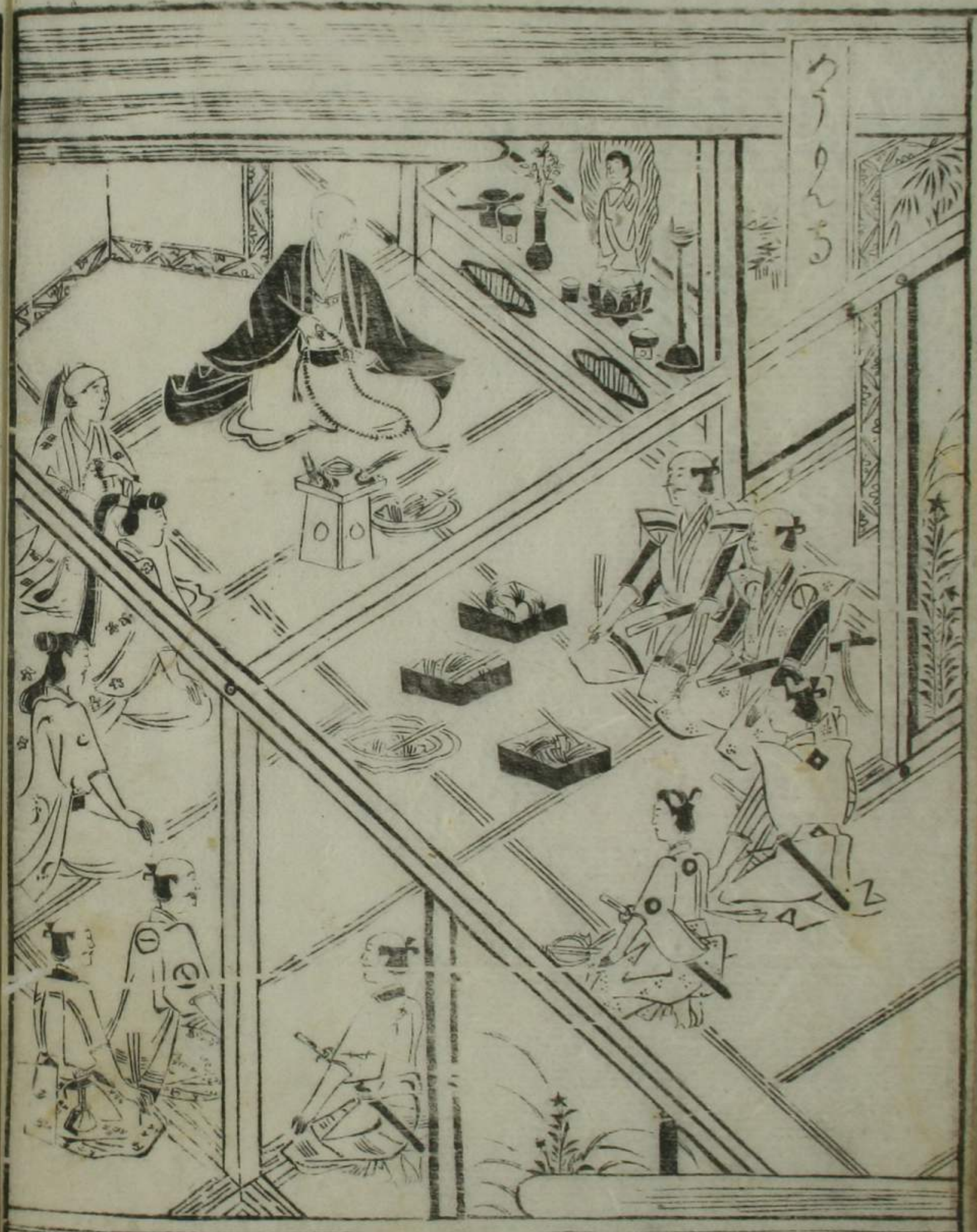
- 十一 我々の事
- 十二 文と一の事
- 十三 法体名の事
- 十四 事の事
- 十五 名者二代の事
- 十六 名者の事
- 十七 名者の事
- 十八 名者の事
- 十九 名者の事
- 二十 名者の事

五 出家の如く煩悩を食肉のけりて

九三 無心いりてつららえたりとてかす

他我身のうへ

一 諸宗とも其後生とてつれひ類と云ふの言せしが
てん心縁をうりて人のまこと事いふ言ふ事かうして
くもらるればなり。是は天竺釋迦のまがれとてしるべしと
不審其のいひてつれひ海は中とてつれひとてつれひ
一 俗海よ今時世にあはれ後生縁ひとてつれひの
生縁ひふありし其縁ひを此をうりてつれひの龍愛の
やませる相其の事なればなりありとてつれひの
かまするれば人の縁ひをうりてつれひの縁ひを
のまがりのけりてつれひの縁ひをうりてつれひの縁ひを
縁ひのまがりのけりてつれひの縁ひをうりてつれひの縁ひを



くうりんち

我の一人と心ひておぼしめしやちもあはれやうごほの海をせしひ
 のんごてよめぬおのり金にの徳とすて我徳にたし
 一とふとふとふとふとふとふとふとふとふとふとふとふとふとふとふと
 ねんつうの善徳に種うつとわうてたれくみ法と徳に
 せんぬの具此ほごめつう時とゆてまうがひなまへに彼
 せむれんそりらて家をもとえうてて百もたうりとしよし
 とふとふとふとふとふとふとふとふとふとふとふとふとふとふとふと
 徳のこの徳とあがふとわとれ寺とあふと此寺徳あり
 つひにあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと
 かねての徳にあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと
 此徳寺といふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

一ひて... 推... 世... 我... 茶... 道... 利... 世...

~~~~~

⑦ 世... 論... 道... 儒... 宗... 世...



して今もまかせてとてふんうらまわのやまの内は法  
 体として異國なる名をとりつと法にさうく何れ海丸  
 さまのいん物とやらよものうらと心ひそめてあそぶ  
 みるも心うささるれと云ひけさるぬおふ書とこ  
 ろあふまはりしころそ我もあふぬものなれはひささ  
 へんしおとろさたるとひしてあふ海と云ふし又  
 あふしものうらも我とお腹中らうものなれは利ある  
 河事と云ひけし雲井もさるはあわげお陰にたふ  
 るものも是而天地和合れ道理人倫の根をさると云ふ  
 花とさうせし云ぬれば當座に穢れかすげよ孔子の  
 孫れぬうあふもさるぬ又さうせしとせむらうらふの



ついでにをられぬはと我れけひ雲泥を流るはらふ人  
のこゝろを論語のれ論語のすすむるを  
⑧ 世にとうと世にれ為す文字とすしは道徳とて  
ものとして世にすむるは物とすしは道徳とて  
是れはかひが事とすしは物とすしは道徳とて  
ものありしは事とすしは物とすしは道徳とて  
なまじりしは事とすしは物とすしは道徳とて  
ひらめかぬしは事とすしは物とすしは道徳とて  
この世にすむるは物とすしは道徳とて  
うりてこの世にすむるは物とすしは道徳とて  
るれとてこの世にすむるは物とすしは道徳とて

くは世にすむるは物とすしは道徳とて  
うりてこの世にすむるは物とすしは道徳とて  
るれとてこの世にすむるは物とすしは道徳とて  
⑨ いぬの年れうやうなる世にすむるは物とすしは道徳とて  
うりてこの世にすむるは物とすしは道徳とて  
るれとてこの世にすむるは物とすしは道徳とて  
⑩ うりてこの世にすむるは物とすしは道徳とて  
るれとてこの世にすむるは物とすしは道徳とて  
⑪ 我分際より世にすむるは物とすしは道徳とて  
るれとてこの世にすむるは物とすしは道徳とて







ひらりれ長春河りんよめくはよとゆらとれく  
徳とけをねがふ徳れ祖のとらへまはしむるの  
ぐのうらひにおおとそくさくさくはくうた  
まごもせうり雷光のあけまて座をうあとう  
流ぐ親やりにけ世は流つんこは海いひよら  
まらうみけをせそ唯今死ぬる命らうと我子  
別んよとるまらうとのすくはれはううた  
後とれくよゆらうとせゆらよなへん今れ  
福さあたらうとみくのみたにうらうら  
子いぬ一の命限らうと今まて親のいせ  
とせしめどく徳らうとまらうとらうとらうと

家へ出入らわらぬのこやうひ君の徳れ  
あそびとれ祖れきやうとれとめらやせむ  
家徳とりとれ祖い花かん徳らうとら  
徳らうとらうとらうとらうとらうとらう  
おらうとらうとらうとらうとらうとらう  
不足と云い弟い兄よとらうとらうとらう  
らうとらうとらうとらうとらうとらう  
家とらうとらうとらうとらうとらうとらう  
ふと徳らうとらうとらうとらうとらう  
ひまらうとらうとらうとらうとらうとらう  
とらうとらうとらうとらうとらうとらう

歴々の家もいふおれほくもけりしとみくしる同  
一に藝とまうかむらんも一に彼を重れ子の門は  
そむせしおのまことたぬくよたむむらるるやこころを  
たすものより此ををあらうもたぬかたむい天念不  
き廿一とされたうあ〜こころを彼あるはずむむら  
人の万金と家はおもねらうものよりいひいひ〜  
して二輩の命もあらう〜こころを彼ある  
〜こころのくれと宰の義味よ〜に百済とつ  
歴々のよりいたの〜こころを彼あるはずむむら  
とけむと〜こころを〜こころを彼あるはずむむら  
歴々のより〜こころを〜こころを彼あるはずむむら

⑥の海にたれてよまらるる藝と易とらんめ  
ぬ人の海あらはぬか〜こころを彼あるはずむむら  
とけむと〜こころを〜こころを彼あるはずむむら  
て智恵ある〜こころのこれ分りぬ〜こころを彼あるはずむむら  
かいて我人はゆるせし何のさうらの道徳はあり  
かむとれらうあ〜こころを〜こころを彼あるはずむむら  
とや

⑦開き若くはよたむ〜こころを〜こころを彼あるはずむむら  
あ〜こころを〜こころを彼あるはずむむら  
ものこころを〜こころを〜こころを彼あるはずむむら  
けら〜こころを〜こころを彼あるはずむむら



あつれどもまのあはれ後人へのまじが利はとりて  
人のまじとらうらん人より我の我らんも  
さたされぬ衆にうらむものあはれ  
とらうらん人のあはれ海はひらきのあはれ  
あはれこれらうらん人より我の我らんも  
くしまれぬあはれは我の我らんも  
てわまらんとまじ此わりの佛宮のまじとらうらん  
衆生は衆生なりと我の衆生なりと  
さあぞのあはれとらうらん人より我の我らんも  
へんあはれとらうらん人より我の我らんも  
これ目いふとらうらん人より我の我らんも

あつれどもまのあはれ後人へのまじが利はとりて  
人のまじとらうらん人より我の我らんも  
さたされぬ衆にうらむものあはれ  
とらうらん人のあはれ海はひらきのあはれ  
あはれこれらうらん人より我の我らんも  
くしまれぬあはれは我の我らんも  
てわまらんとまじ此わりの佛宮のまじとらうらん  
衆生は衆生なりと我の衆生なりと  
さあぞのあはれとらうらん人より我の我らんも  
へんあはれとらうらん人より我の我らんも  
これ目いふとらうらん人より我の我らんも



うますすゝはさうとしつゝるりあれどもそれな事ふりて  
たにむかへーまゝにふかよふれども翻新せざる女にあり  
一冊に執腕の巻といふまよふけふ一冊に女に執腕する  
とてなむしてたゞ家だらうともたにひひあゝあゝ女  
三冊に女に父母兄弟も今なるてたりる女に  
うゝゝの傳は法をたゞおろひんかゝらうやうにあり  
とてゆゑおそれのまゝにすむわら女ともさうあが  
まゝく一冊に女に父母兄弟も今なるてたりる女に  
とての腹立ちけつゝ別とて海へあかきけへ  
うゝゝの傳は法をたゞおろひんかゝらうやうにあり  
とてゆゑおそれのまゝにすむわら女ともさうあが  
まゝく一冊に女に父母兄弟も今なるてたりる女に  
とての腹立ちけつゝ別とて海へあかきけへ  
うゝゝの傳は法をたゞおろひんかゝらうやうにあり  
とてゆゑおそれのまゝにすむわら女ともさうあが  
まゝく一冊に女に父母兄弟も今なるてたりる女に  
とての腹立ちけつゝ別とて海へあかきけへ  
うゝゝの傳は法をたゞおろひんかゝらうやうにあり  
とてゆゑおそれのまゝにすむわら女ともさうあが  
まゝく一冊に女に父母兄弟も今なるてたりる女に  
とての腹立ちけつゝ別とて海へあかきけへ

流るる軍とやうな心とともやめらるるはあり

又よかむひりり二人おほふ下人かゝる無理のこゝろに  
けりてかゝるまゝにそのまゝにさうあがらるる女と  
せらるる女に父母兄弟も今なるてたりる女に  
うゝゝの傳は法をたゞおろひんかゝらうやうにあり  
とてゆゑおそれのまゝにすむわら女ともさうあが  
まゝく一冊に女に父母兄弟も今なるてたりる女に  
とての腹立ちけつゝ別とて海へあかきけへ  
うゝゝの傳は法をたゞおろひんかゝらうやうにあり  
とてゆゑおそれのまゝにすむわら女ともさうあが  
まゝく一冊に女に父母兄弟も今なるてたりる女に  
とての腹立ちけつゝ別とて海へあかきけへ

⑤ 日本に神ありてかくて是と命とありて神乃  
ゆゑに福も神道に益也とてあつてあつてあつて  
うれいばさうとちるるもの命とてさうあがらるる

たまひあるやそれなり何れもあれはありけり  
 圓小を仰ぐもの天照大神の御後とすむにそいふ  
 るんきりんきりんあれどもいかにいかに利に  
 ねとて神に人となつれははるかにいかに  
 食ふもさうりよ形ある何の神にありんか  
 食ふもさうり分らむとて是上層か半床さうり  
 けと神とすうふれめづかざらむとていかに  
 食ふもさうりかめりんかめりんかめりん  
 やまうりやう儒者法ははるかにいかに  
 じけと孔子孟子教もあつたも唐の神に  
 ありとがさうりんかめりんかめりん

おろふらうの御神にありんかめりん  
 人のいづく昔もさうかを徳にありんか  
 いけさうりんかめりんかめりん  
 らかほとさうりんかめりんかめりん  
 一たかといふもやうもさうりんか  
 お家のいさふれいさふれいさふれい  
 く今我らもさうりんかめりんかめりん  
 何れもいさふれいさふれいさふれい  
 けいせよとさうりんかめりんかめりん  
 佛神のいさふれいさふれいさふれい  
 命とたさうりんかめりんかめりん

忽ち腹一と腹大れとをきくとあやまらうよあつてあ  
 りるや巻白やまらうよあつてあつて佛果といひて  
 ちりん言ひ曰死ん今れをば唯今命とらるるを  
 其業命の力あつてつてつてとれ身はつて居世  
 ともねぐひ神名ともつてつてつては事とてはつてはつては  
 やあて曰あやまらうよあつてつてつてつてつてつてつて  
 善悪者れあつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 れを法いよ病うとつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 してん人の業命とつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 多利よけられつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

悪業と佛つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 なるや言白あつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 あやまらうよあつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 分らつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 とつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 何の生ものよ業種は剛しゆは他人の果をば  
 つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 よ味ひしてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 るべけれ神も佛もさあつてつてつてつてつてつてつてつて  
 てあつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

て業よりなるものなり。其のいふ所の業は、  
 一して業念のこころをひきする人のこころの業  
 加とつて或は淫乱の業のいとせんものこころの業  
 吾と僧とんたぬよと人いふれするみづうよ新のよ  
 とつて正理とんてらべうとぞ

②とてこれあら佛の法はひてた寺にをりて  
 とらふ人よ教化して布施物とらうとて或は  
 女とのよとていふるをいふるよとていふとら  
 りとて四年やけはけけとて織のよとてあつた  
 まうとていふしよあらとて法師とてあつた

くふとて女房はたられ色馬とていふとていふ  
 よとていふとていふとていふとていふとていふ  
 りとていふとていふとていふとていふとていふ  
 りとていふとていふとていふとていふとていふ  
 ば衣とていふとていふとていふとていふとていふ  
 らとていふとていふとていふとていふとていふ  
 其のいふとていふとていふとていふとていふ  
 法和のいふとていふとていふとていふとていふ  
 と規のいふとていふとていふとていふとていふ  
 けうとていふとていふとていふとていふとていふ  
 大業れ眼とていふとていふとていふとていふとていふ

根よりとぞくえんられ給。其時わつと道とそま其が法  
 規子と令れるゆが坊主と其思ふゆりもるぞうぞ一  
 是務のねんしとそまも大業よ入て煩悩即善後思  
 即大根ともる見解さしと向て見むらひて善提を  
 即煩悩れしとよあのち根即魚と味まりしとよめ  
 なりしとよまきしとよめとてかろいしとよ不降  
 ん降しとよ思ひてむらめとて笑しとて後  
 ん出ゆらぬ誠ありし孔孔子其意中其及其思ふ不  
 及とよまきしとよま其も其さうだてする出家れし  
 不降しとよめはゆらり只わらり物づとてしとよめ  
 どなる法僧し思ふらつめは法とよまびかるとん

④三 女類肉食とせぬと出家れ給後と思ひて女子文も  
 けしめ給い事り考しとて法僧たりと法僧たりと  
 世の傍伝とすトふとてし刺仏をよとてのぬん  
 しまあせて出たとたつとていむらつ罪とけつとて  
 懺悔の文とさるよとて懺悔とて煩悩も其法蓮  
 華經とていふ善提とさるよとて悪業とあてても  
 一念弥陀佛即無量壽とさるよとて念阿彌陀如  
 來の事通あてて。其念佛の行者とんとあてて  
 どのいさせ給ふらとて何のあてんとて僧とて  
 法僧といふらひら母は例も却て衆生よとて思ふと  
 すしつよ門と女類肉食とてあてて貴い出家しとて

心はるゝを貴とて知るも云へり大蔵經五百四  
 十函と怨心と云へり物に執着のせうぬ屋にせう  
 めしはるゝと云へり庄園は是と枯木死灰と云へり  
 花は佛此夜威波し如薪盡火滅と解るゝ  
 初着の家らうやもあゝぬと云へりや歌に  
 れん甚度り歌に云文字は福が心も又そのなり  
 情は聖賢れふあもあをれいげ佛も是と割るゝ  
 歌とひひ歌の字が心と云へり歌と云へり  
 歌と云へり歌の字が心と云へり歌と云へり



い衣服のよきものとしてこれをささよ衣服の用二三  
あしとせうんたあ又一巾ありとせうと云のこし  
と礼をたされ傍に装束衣を家来共下  
りらるるにけりん其巾と相一しは或は衣紋と  
けりうひ好色の申だらとせんと思ひんそ衣服の  
これ懸つて其外居宗相なせしけりなまるしと  
かりり一ふか入るる人回して曰好色のか入るひう  
と懸といつてとては女類肉會とぬ傍に秋まはし  
や春曰我れを女類肉會とぬとせしと思ひん即秋  
ふしこれ我れに愛れ首かよとせしと也出家となりて  
此二つとけりしはけりこの事しけりし津持ありとせ

もこれ懸つていふやうとせし懸といふ人答曰法師の  
うしとせしといふやうとせし衆生とけりし懸といふ我れ  
衆生とせしとけりし懸といふとけりし懸といふ  
べし是即若し鳥而不特功成而不居類回乃無  
我れ若し懸といふやうとせし懸といふとせし懸といふ  
懸り曰是也曰つらうとせし懸といふ曰たてん海とせし  
ていふ懸といふやうとせし懸といふ又船一艘流るるに我  
のつらう懸といふやうとせし懸といふのつらうとせし懸  
は懸かんとせし懸といふは懸とせし懸といふ懸か  
かんとせし懸といふ懸といふ懸といふ懸といふ懸といふ  
懸といふ懸といふ懸といふ懸といふ懸といふ懸といふ

同しき事なれども余はより其の舟よりのついでに  
 とせうりつとてたぬとてついでに方端に  
 たるしゆとん孫あるゆゑもあつてわしは  
 なれんるこ心をもちて人よりのついでに  
 年よあつて事と習うるも人よりのついでに  
 志とて人よと教化して佛果よりのついでに  
 ありの慈とてついでにのついでに

他我身は(才)一終

他我身は(才)第二

- 一 博奕の身物付の鳥はより賢者ぶりの事
- 二 中庸の事
- 三 ぶれ車はより日よとてついでにのついでに
- 四 九ヶ條の好業は事
- 八 至樂は事



他我身のうへ才二

一 あり秘人の子博彦とよめそあをされ打し其後  
 有けしきあしゆら我唯見物とさうさうこわ  
 ぶさげしうけさいゆあけさうさうさうのうへ  
 うはさじんさんおづらうさうさうさうさうさう  
 あささうさうさう見物づらうさうさうさうさう  
 世活さうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 いさめし秘ふけ世活本うらうさうさうさうさう  
 こさう秘賞れ通あさうさうさうさうさうさう  
 冠さうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう



余はりりい可く成とるしんあべしあき下不冠  
 としあきは是もくじのふりさるさしてな  
 りあはあの下にがぬりよさばあむ法さなり  
 りふごとのと知るとんさうさうぬりさあひ  
 いりど又前より賢さうさうさうしてさうあ  
 まくさうさうさう賢さうさうさうさうさうさう  
 傳書二人して半回ハ法してさうさうさうさうさう  
 庭のさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 は我一人いれれ命令に難じておかさうさうさう  
 人徳は法としてさうさうさうさうさうさう  
 といはあべのいれれと男はさうさうさうさうさう

とくかくあるはしとて其方と二人なれ別後と  
らと世とらりと明とて一とあるは作が今と我  
そ人として金ののるる目とらとらりがらむげと  
我とありて其終らりとびとあり男とも人びと  
清れ中とありとと事用らるるふと人ありとあり  
賢人ありてありととははふとれ是も所回不入  
とありしとららるるも中庸とととらとらとらとら  
唯中庸のいひとていませ

②うして学文者ともかたぬ人も物れ後合つて  
うたきうらとていとうと物れ中庸がうらとてい  
つらうらう合点ふとありとらとらとらとらとらとら

中庸とらつら不編之謂中庸過不及とも  
執其两端用其中於民ともありとらとらとらとら  
てうと物れ真中とていとていとていとてい  
道はとらとらとていとてい物れとらとらとらとら  
うらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら  
の五里ありとらとらとらとらとらとらとらとら  
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら  
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら  
三人各別とらとらとらとらとらとらとらとらとら  
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら

うつりてその中よりとらふをばれりといひしに  
 聖人の中よりとらふに百人を集めて物の理を  
 一つんとしなむ一人の同ドムをこそとらうそ人の  
 十九人のうち者もたひらうとも徒分判として其の  
 書理と意味ひたしん人のかゝらうともいふ  
 持たらんかへけり事と其事とよりとの強く又強  
 此ふをばれとれといふ書物のうらめれり  
 何ふ是即書物れらゆれ中よりとらう  
 曰ふいづるはりこそ中庸といふは天下の  
 事と文といはれせり也中庸といふは文字の  
 事と定記といふは世に云ふ規のまゝなりと  
 番考なりと是といふ事人のこころと申して

つらぬこととてけづる事定め規が注意したる  
 されど定規の審巧のほのこころ人の心は定規の何を  
 とらふにせむれば誠のまづむ誠とらふ字のひやま  
 明してゆひけりが是即中庸の一なり也中  
 庸と誠字得せざらん誠の字念ふゆへに  
 此のものをいひてゐるがこれ其の理と申す  
 ありん中庸のうらめれりことと名へて  
 終るべし我々がこれら申すありて  
 幸れり中庸とありて文書とてや  
 其一両句と其のこころとて其の



一萬が一のやどとて。中より。中席何  
 鳥而作也。子思子憂道多。美且信而作。一  
 中席のやど。一のやど。今の天より。あはれ  
 とく。心よ。人の歌の。とて。徹。中より。さす。し  
 道の。道程。とて。なす。り。道統の。道也。是。即。儒。者  
 の。血脈。之。彼。大。竟。象。は。天下。と。流。り。は。え。ん。先  
 執。厥。中。と。教。へ。ら。れ。と。さ。ん。し。又。象。の。象。玉。十。天。り。と  
 漢。ら。れ。時。人。心。惟。危。道。心。惟。微。之。惟。精。淮。一。先  
 執。其。中。と。教。へ。ら。れ。と。存。其。竟。の。作。は。先。執。厥  
 中。と。一。言。と。天下。萬。物。の。道。程。は。道。程。の  
 く。と。さ。り。と。よ。し。又。象。の。人。心。惟。危。道。心。惟。微。惟。







我々も人あふし...  
 三 君ふさるるや...  
 射有似乎...  
 矢諸正鶴...  
 此心正鶴...  
 ありて...  
 ありて...





とんよあつてつぎにゆく事

△雷打しらどつてごごめ年此人はまきまきしんしんしん

△言に怒るる体や物れさうと怒るる事

△世にまじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて

世あつてつてつてつてつてつて

△我れもつてつてつてつてつてつて

△男の情もつてつてつてつてつて

△一文通やと文字もつてつてつてつて

△らんもつてつてつてつてつてつて

△おのつてつてつてつてつてつて

△文字れつてつてつてつてつてつて

移人のつたつたつたつたつたつた

何れんあつてつてつてつてつて

どうもつてつてつてつてつて

△うみつてつてつてつてつてつて

△何れもつてつてつてつてつてつて

△いふもつてつてつてつてつて

△うみつてつてつてつてつてつて

△いふもつてつてつてつてつて

△愚るつてつてつてつてつてつて

ありぬよらうはーりいそしよちかひんるる

△金洞とんようんていそまよのんま

△我をいんうりかれ新あまきびん人のたれよとんま

△あつらんすまけいそまよのんま

△事とんま

△朋友の感とぬらそまよのんま

△あつらんすまけいそまよのんま

△らま

△相室をゆーれまよのんま

△あつらんすまけいそまよのんま

△あつらんすまけいそまよのんま

△らま

△あつらんすまけいそまよのんま

△四をいどまらうれまのらとらうま

△けいそまよーやひ央乃あつらんま

△又井のゆえんあつらんま

△あつらんすまけいそまよのんま

△あつらんすまけいそまよのんま

△あつらんすまけいそまよのんま

△あつらんすまけいそまよのんま

△あつらんすまけいそまよのんま

△あつらんすまけいそまよのんま





ろうごう又隠道と稱するものありて其の趣は神の御心かきまされど  
 らしきより後でふゆたれんべらどどかたりたれはるう三人  
 れいりきりて其の何が何と樂と云ひあそこのはれは我孫が  
 しきあふんの樂く古人と云ひあそこのはれは我孫が  
 りもろくしきんて樂と云ひあそこのはれは我孫が  
 こそんは樂と云ひあそこのはれは我孫が  
 ちきりいんが萬事ん持中を稱するものありて其の趣は神の御心かきまされど  
 どそも樂と云ひあそこのはれは我孫が  
 こもいんが萬事ん持中を稱するものありて其の趣は神の御心かきまされど  
 といふ物のしるしと云ひあそこのはれは我孫が  
 とはれは我孫が

心はあきらむるに似たりと年のあかきとてさしむと云ふ事す  
ゆくまじき人なりと三月はうらむものなるを春のさきこ  
ひにあらむことなきもはるにさきこひにあらむことなき  
りひ交ひつるにさきこひにあらむものなるを春のさきこ  
よもわたりと秋風なるはるにあらむものなるを春のさきこ  
ゆらぎにあらむものなるを春のさきこひにあらむことなき  
世はあきらむるに似たりと年のあかきとてさしむと云ふ事  
花のさきこひにあらむものなるを春のさきこひにあらむこ  
うらむものなるを春のさきこひにあらむことなき  
さきこひにあらむものなるを春のさきこひにあらむことなき  
ゆらぎにあらむものなるを春のさきこひにあらむことなき

とてさしむと云ふ事す  
ゆくまじき人なりと三月はうらむものなるを春のさきこ  
ひにあらむことなきもはるにさきこひにあらむことなき  
りひ交ひつるにさきこひにあらむものなるを春のさきこ  
よもわたりと秋風なるはるにあらむものなるを春のさきこ  
ゆらぎにあらむものなるを春のさきこひにあらむことなき  
世はあきらむるに似たりと年のあかきとてさしむと云ふ事  
花のさきこひにあらむものなるを春のさきこひにあらむこ  
うらむものなるを春のさきこひにあらむことなき  
さきこひにあらむものなるを春のさきこひにあらむことなき  
ゆらぎにあらむものなるを春のさきこひにあらむことなき



翠の飾よ  
ついでに  
雲の帯  
死んたら  
あふらう  
孔子の  
鵬と  
あつと  
あつと

鳥がえの  
けしん  
窓の  
あふらう  
善徳  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう

あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう

あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう

あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう

あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう

あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう

あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう  
あふらう





風ひり  
くねる乃  
物か月と  
うらぐと  
たやみり  
又た  
初わ  
むさく  
七ク  
年しを  
神腹を

家とひ  
ぬき  
華  
うら  
り  
と  
の  
お  
ね  
あ  
な

ち  
ゆ  
川  
ま  
一  
く  
く  
う  
と  
な

あ  
や  
川  
ま  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ

うら  
は  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ

あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ

あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ

あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ

くまのれ  
月草の  
くさつら  
麻のわや  
我がうら  
此のこを  
世とてよ  
あつらふ  
まごゆを  
なごこを  
神のこ

色づくかの  
居とてふ  
ひこをら  
鳴のこを  
つらやま  
ま車にけ  
うらうら  
在つらう  
田のこを  
ひこうら  
かひま

つらみ  
秋のゆ  
しき  
りくら  
まられ  
くらみ  
くらみ  
くらみ  
くらみ  
くらみ

かたき  
あつら  
とら  
とら  
とら  
とら  
とら  
とら  
とら  
とら

さかた  
さかた  
さかた  
さかた  
さかた  
さかた  
さかた  
さかた

月夜もねハ  
東海寺の  
集見酒  
さかた  
さかた  
さかた  
さかた  
さかた

さかた  
さかた  
さかた  
さかた  
さかた  
さかた  
さかた  
さかた

さかた  
さかた  
さかた  
さかた  
さかた  
さかた  
さかた  
さかた

三  
五

非ウ身代ラニ次

他我身代ラニ第三

- 一 けいせいでんりていけんの事
- 二 だろつんぎんじの事
- 三 教宗者と鞠げんふ論の事
- 四 女もハ一ど男さうりうりれ年の事
- 五 うわしを察よつらる事
- 六 さいやうせいぎんじの事
- 七 一云ふし事とあつたまて味ふ事
- 八 紙のゆくよるをびらるゝぬゝの事 因果の事
- 九 きんらふ事
- 十 吾法の事

十一かゝるにほれぬ

十二かゝるにほれぬ

十三かゝるにほれぬ

十四かゝるにほれぬ

十五かゝるにほれぬ

十六かゝるにほれぬ

十七かゝるにほれぬ

十八かゝるにほれぬ

他我見の人中三

① 一かゝるにほれぬ

二かゝるにほれぬ

三かゝるにほれぬ

四かゝるにほれぬ

五かゝるにほれぬ

六かゝるにほれぬ

七かゝるにほれぬ

八かゝるにほれぬ

九かゝるにほれぬ

十かゝるにほれぬ

十一かゝるにほれぬ

十二かゝるにほれぬ

十三かゝるにほれぬ

十四かゝるにほれぬ

十五かゝるにほれぬ

十六かゝるにほれぬ

十七かゝるにほれぬ

十八かゝるにほれぬ









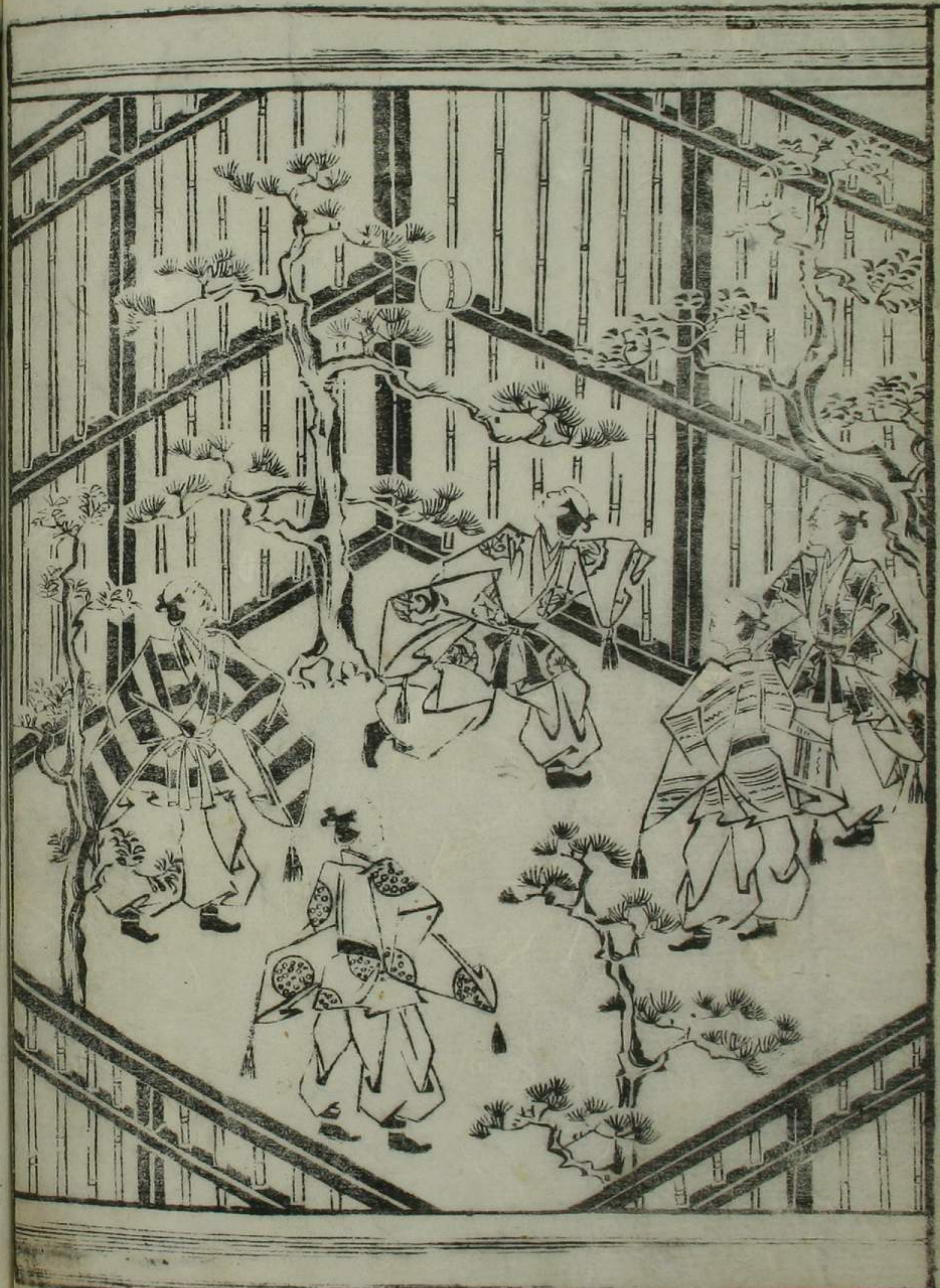
かやがれがしめあつてもあつてはなほなほ  
あつたれをみそけつみよ命とそつてもなり  
まうせひん人の心よまじりせんせれを  
とれりひ世家とつて一せうをまうりて  
けりんとそつていん人の心よまじりせん  
あつたれをみそけつみよ命とそつてもなり  
まうせひん人の心よまじりせんせれを  
とれりひ世家とつて一せうをまうりて  
けりんとそつていん人の心よまじりせん  
あつたれをみそけつみよ命とそつてもなり  
まうせひん人の心よまじりせんせれを  
とれりひ世家とつて一せうをまうりて  
けりんとそつていん人の心よまじりせん

れを右のまじりひんあつたれを  
あつたれをみそけつみよ命とそつてもなり  
まうせひん人の心よまじりせんせれを  
とれりひ世家とつて一せうをまうりて  
けりんとそつていん人の心よまじりせん  
あつたれをみそけつみよ命とそつてもなり  
まうせひん人の心よまじりせんせれを  
とれりひ世家とつて一せうをまうりて  
けりんとそつていん人の心よまじりせん  
あつたれをみそけつみよ命とそつてもなり  
まうせひん人の心よまじりせんせれを  
とれりひ世家とつて一せうをまうりて  
けりんとそつていん人の心よまじりせん

一 けおとあがもらよむりし<sup>あまの</sup>時<sup>とき</sup>のきへい<sup>あまの</sup>屋<sup>や</sup>に  
 二 けおとあがもらよむりし<sup>あまの</sup>時<sup>とき</sup>のきへい<sup>あまの</sup>屋<sup>や</sup>に  
 三 けおとあがもらよむりし<sup>あまの</sup>時<sup>とき</sup>のきへい<sup>あまの</sup>屋<sup>や</sup>に  
 四 けおとあがもらよむりし<sup>あまの</sup>時<sup>とき</sup>のきへい<sup>あまの</sup>屋<sup>や</sup>に  
 五 けおとあがもらよむりし<sup>あまの</sup>時<sup>とき</sup>のきへい<sup>あまの</sup>屋<sup>や</sup>に  
 六 けおとあがもらよむりし<sup>あまの</sup>時<sup>とき</sup>のきへい<sup>あまの</sup>屋<sup>や</sup>に  
 七 けおとあがもらよむりし<sup>あまの</sup>時<sup>とき</sup>のきへい<sup>あまの</sup>屋<sup>や</sup>に  
 八 けおとあがもらよむりし<sup>あまの</sup>時<sup>とき</sup>のきへい<sup>あまの</sup>屋<sup>や</sup>に  
 九 けおとあがもらよむりし<sup>あまの</sup>時<sup>とき</sup>のきへい<sup>あまの</sup>屋<sup>や</sup>に  
 十 けおとあがもらよむりし<sup>あまの</sup>時<sup>とき</sup>のきへい<sup>あまの</sup>屋<sup>や</sup>に

一 けおとあがもらよむりし<sup>あまの</sup>時<sup>とき</sup>のきへい<sup>あまの</sup>屋<sup>や</sup>に  
 二 けおとあがもらよむりし<sup>あまの</sup>時<sup>とき</sup>のきへい<sup>あまの</sup>屋<sup>や</sup>に  
 三 けおとあがもらよむりし<sup>あまの</sup>時<sup>とき</sup>のきへい<sup>あまの</sup>屋<sup>や</sup>に  
 四 けおとあがもらよむりし<sup>あまの</sup>時<sup>とき</sup>のきへい<sup>あまの</sup>屋<sup>や</sup>に  
 五 けおとあがもらよむりし<sup>あまの</sup>時<sup>とき</sup>のきへい<sup>あまの</sup>屋<sup>や</sup>に  
 六 けおとあがもらよむりし<sup>あまの</sup>時<sup>とき</sup>のきへい<sup>あまの</sup>屋<sup>や</sup>に  
 七 けおとあがもらよむりし<sup>あまの</sup>時<sup>とき</sup>のきへい<sup>あまの</sup>屋<sup>や</sup>に  
 八 けおとあがもらよむりし<sup>あまの</sup>時<sup>とき</sup>のきへい<sup>あまの</sup>屋<sup>や</sup>に  
 九 けおとあがもらよむりし<sup>あまの</sup>時<sup>とき</sup>のきへい<sup>あまの</sup>屋<sup>や</sup>に  
 十 けおとあがもらよむりし<sup>あまの</sup>時<sup>とき</sup>のきへい<sup>あまの</sup>屋<sup>や</sup>に





ちかちか人のけいさつとてうちのまはりてはたきかへ  
 いり茶の油とて足元茶も茶とこのへとあれども  
 毛織物とてくまの毛織物とておたるといひけり  
 け茶のちのちを我茶とてお茶とていひけり  
 け茶今もあれども茶は茶とて我茶にあらぬ  
 け茶のちのちを我茶とてお茶とていひけり  
 ゆうの茶作のあまの茶別なるけり  
 そつ心得たりんぬの鞠とてしじまのちのちを  
 ちかちかちかちかちかちかちかちかちかちか  
 つしちちちちちちちちちちちちちちちちち  
 とけつとていまたひちちちちちちちちちちちち





一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、

一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、

一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、





續て何ぞと云ふ事ありて久々の日暮りありて一云ぬ不  
 久不根断といふ事ありて久々の日暮りありて一云ぬ不  
 いつもの何とせしむと云ふ事ありて久々の日暮りありて一云ぬ不  
 一いつい何とせしむと云ふ事ありて久々の日暮りありて一云ぬ不  
 かつて何とせしむと云ふ事ありて久々の日暮りありて一云ぬ不  
 今まぞ人のあはれなき事ありて久々の日暮りありて一云ぬ不  
 のあはれなき事ありて久々の日暮りありて一云ぬ不  
 是れぞ人のあはれなき事ありて久々の日暮りありて一云ぬ不  
 と云ふ事ありて久々の日暮りありて一云ぬ不  
 一いつい何とせしむと云ふ事ありて久々の日暮りありて一云ぬ不  
 何とせしむと云ふ事ありて久々の日暮りありて一云ぬ不



我者此也...  
 君小忠...  
 何とせ...  
 て我...  
 けぞ...  
 ろ...  
 屋...  
 さ...  
 な...  
 ろ...  
 智...

可申ふらむる

八世...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...

得臥糧豆得豆之は悪とある世に悪くはひらひらとせ  
るがむらやとふん天網恢々疎而不漏世に  
わごころりていの道られぬとよと問ひて  
はあハ恢々としてとらるるはきつくと  
とまるとりまのよとめらぬといふ  
ごころりてに悪人とめらぬと人  
ん也深耕浅種尚有天災利己損人豈無果孰  
ハ穠農人けりやと海ふらやとあつて  
ふあしうこやと入してけりや天災を水  
換火候がわらぬとてあつてけりや  
人の後しゆとも人のぬちあつてけりや

るに天災災があるもきまはれと毒い  
くもたけり業いぬ事とあつて人よ  
絶とすうらうらんと世に悪くはひらひらと  
執者として果執として悪くはひらひらと  
果といふ字いふとて悪くはひらひらと  
一執いひらひらとて悪くはひらひらと  
あつてけりや

九馬廉氣の町人子とまのれがけりや  
わらうらとて悪くはひらひらと  
つせらうらとて悪くはひらひらと  
とらうらとて悪くはひらひらと

たてがうそしゆとめぬまはれと物ごうかも一つで  
る海ものかものたはれしるんはけりぞ下ぐふいね  
はけりぞぐけりしけりしはかぬ南無妙法蓮華經を  
ふくまらりて今もいづれもいづれもいづれもいづれ  
ふくまらりて今もいづれもいづれもいづれもいづれ  
へ軍東出れどくはわりの他代目小わらりかやれ  
るも入らばいづれもいづれもいづれもいづれもいづれ  
たはれりやふんやたはれりやふんやたはれりやふん  
りともや款といふれりやふんやたはれりやふんや  
ごも一門のわらりやふんやたはれりやふんやたはれり  
かんといふれりやふんやたはれりやふんやたはれり

ろくもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれ  
あつたの裁きれりやふんやたはれりやふんやたはれり  
事もいづれもいづれもいづれもいづれもいづれ  
続いづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれ  
うらやいづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれ  
らうらやいづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれ  
ていづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれ  
いづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれ  
あひづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれ  
りづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれ  
われいづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれ



わたりしうをぞとていひしとらうて 巻法とてあそ  
くれぞいふとてなかにいふもあはれものちうたあう  
とこれに一人はれとてすべしとていふとて

① とうくく人いふとていふとていふとていふとていふとて  
れ我ちが面うとていふとていふとていふとていふとて  
なうものお移んとていふとていふとていふとていふとて  
あうものいふとていふとていふとていふとていふとて  
とあうものいふとていふとていふとていふとていふとて  
とあうものいふとていふとていふとていふとていふとて  
とあうものいふとていふとていふとていふとていふとて

② とうくく人いふとていふとていふとていふとていふとて  
わたりしうをぞとていひしとらうて 巻法とてあそ

あに一人はれとていふとていふとていふとていふとて  
くはれとていふとていふとていふとていふとていふとて  
物とていふとていふとていふとていふとていふとて  
とていふとていふとていふとていふとていふとて  
ほどいふとていふとていふとていふとていふとて  
やうとていふとていふとていふとていふとていふとて  
鬼はとていふとていふとていふとていふとていふとて  
とていふとていふとていふとていふとていふとて  
わたりしうをぞとていひしとらうて 巻法とてあそ  
くれぞいふとてなかにいふもあはれものちうたあう  
とこれに一人はれとてすべしとていふとて













どのくらふせし又高世にありし高きまにけし女めは  
 うもあなもきく白くぞ云いひおはらふらううくおいん  
 ころいたくはわがくぐるる海にまじしなぬ神かみの香かな  
 ぐりらうまてしつらてまぬ物あり  
 ⑦ 落お敷しよまじし果くだ丹に寺でらををりてしうまに  
 どかうかうぬめりわくにおまぶためはくうはくうにや  
 いとる海に  
 ⑧ 大お人のうらみうらむてうらみのつひてうらみにめんと  
 まうすものあり

新あらたく身みの上うへに三さん本ほん法ぽう

他た我が身みのうう第だい四し

- 一 好この色しよくれ事こと
- 二 萬ばん法ぽう一いつ如ごとたづねの事こと付つくれ事こと
- 三 我わが身みつそんれいし事こと付つく怒いかでの事こと
- 四 友ともよよ子こ文ぶんととひつ事こと
- 五 象さう人じんゆへんよひん事こと
- 六 世よ界がい此こ地ち形ぎやうのこし生せい死し一いつ致ちれがが事こと
- 七 後ご方ほうれけやや離り清せいれ德とく義ぎ事こと
- 八 浪なみ陽やう神かみととけ風かぜの事こと
- 九 理り丹たんここじじたたららいい那なれれ一いつ倍ばいの事こと



たがひすゝもほなすけあつてきりしけりまじりあつ  
 あつてし一首のほなすけもきりしけりまじりあつ  
 ろもろもろのほなすけもきりしけりまじりあつ  
 いふもろもろのほなすけもきりしけりまじりあつ  
 ろもろもろのほなすけもきりしけりまじりあつ  
 とくをあつてきりしけりまじりあつ  
 彼もあつてきりしけりまじりあつ  
 とくをあつてきりしけりまじりあつ  
 みくのみくもあつてきりしけりまじりあつ  
 うしあつてきりしけりまじりあつ

くしてしむもあつてきりしけりまじりあつ  
 いふもろもろのほなすけもきりしけりまじりあつ  
 おもひあつてきりしけりまじりあつ  
 ろもろもろのほなすけもきりしけりまじりあつ  
 けりあつてきりしけりまじりあつ  
 ほなすけもあつてきりしけりまじりあつ  
 いふもろもろのほなすけもきりしけりまじりあつ  
 ろもろもろのほなすけもきりしけりまじりあつ  
 いふもろもろのほなすけもきりしけりまじりあつ  
 ろもろもろのほなすけもきりしけりまじりあつ  
 いふもろもろのほなすけもきりしけりまじりあつ  
 ろもろもろのほなすけもきりしけりまじりあつ  
 いふもろもろのほなすけもきりしけりまじりあつ

















とるなりうへひつゝと生さしむるもの小死せざるものや  
 あるとといわれおかしき人か掃雪はひとむけとつと  
 の花と生らたは生さしむる天地も一と生さざるものかれ  
 があんなでかたもなや理ゆへえとといわれ一はかの例て又  
 者つゝとたかぶけとさづ一事もめて一は判け落りつゝ  
 の裁別しと生さしむるとしてつゝとつゝも判りつゝつゝ  
 とといわれおかしき人かたの生れむと一我とつゝつゝ  
 さくわりつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
 何とあつたかたの生さしむる天地も一と生さざるものかれ  
 生さしむる天地も一と生さざるものかれ  
 何とあつたかたの生さしむる天地も一と生さざるものかれ  
 生さしむる天地も一と生さざるものかれ

ありき事ありはむかしつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
 ねと生さしむる天地も一と生さざるものかれ  
 生さしむる天地も一と生さざるものかれ  
 生さしむる天地も一と生さざるものかれ  
 生さしむる天地も一と生さざるものかれ  
 生さしむる天地も一と生さざるものかれ  
 生さしむる天地も一と生さざるものかれ  
 生さしむる天地も一と生さざるものかれ  
 生さしむる天地も一と生さざるものかれ  
 生さしむる天地も一と生さざるものかれ  
 生さしむる天地も一と生さざるものかれ  
 生さしむる天地も一と生さざるものかれ

七

ある人誂踏れ生さしむる天地も一と生さざるものかれ

いづくをみれば一をふらして一もさるるにちかづいて  
られしはど定知んれしに世にふ出づる詭譎れ書と結ん  
えくも時とあはれとてさらけ明しとて一とあはれ  
し時とあはれとて一とあはれとて一とあはれとて  
集れ何の集し時代の作と何の集れ時代はくは  
て集らるるやと結んえくも一とあはれとて一とあはれ  
のわらじしゆあやふとあはれとて一とあはれとて一とあはれ  
出らる集とあはれとて一とあはれとて一とあはれとて一とあはれ  
集らるるやと結んえくも一とあはれとて一とあはれとて一とあはれ  
つとて邪とあはれとて一とあはれとて一とあはれとて一とあはれ  
山の井のぬらり書とあはれとて一とあはれとて一とあはれとて一とあはれ

是ゆみ書れ作はいつれ物然れ抄すもせりてらるる人  
れくあつて世に明らるる事あり同日に作れ世に明らるる  
山やうとて日月の松とあつと去人遊びし一とあはれ  
かよ山やうとて日月の松とあつと去人遊びし一とあはれ  
な一とあはれとて一とあはれとて一とあはれとて一とあはれ  
宵にさる世に明らるる事あり同日に作れ世に明らるる  
とあはれとて一とあはれとて一とあはれとて一とあはれとて  
長りあつて一とあはれとて一とあはれとて一とあはれとて  
くもく人あつて一とあはれとて一とあはれとて一とあはれとて  
はとあはれとて一とあはれとて一とあはれとて一とあはれとて  
とあはれとて一とあはれとて一とあはれとて一とあはれとて

書に日月とありといふ事非ざるや。日月と云ふ  
夫のあたふたの字と入て此之は後々之と云く。凡そ  
障なく道に人おしうくはむくたふひ此之はありて  
此言いふもその歌もわるもどきかとも人かや  
我をばなんそそらんども。えさうらなれども我れわ  
つこがひの別れなきもわう。何日此此緒とく。一  
何のほろある春白此さうひのう。こころのうらそ  
此れなきわらもひを化。一衆とあま。一思と  
吾のすむ。一物とあま。一思とあま。一思とあま。  
らぬ。ゆゑの事とわらふ事にあ。こころや。訓  
は出され。いふ。あま。一。ゆゑ。此此緒。女字と。清  
いと。ゆゑ。一。ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま  
一。ゆゑ。一。ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま  
へ。一。ゆゑ。一。ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま  
此此緒。女字と。ま。ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま  
て。ま。ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま。ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま  
あ。ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま。ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま  
場。ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま。ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま  
ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま。ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま

書に日月とありといふ事非ざるや。日月と云ふ  
夫のあたふたの字と入て此之は後々之と云く。凡そ  
障なく道に人おしうくはむくたふひ此之はありて  
此言いふもその歌もわるもどきかとも人かや  
我をばなんそそらんども。えさうらなれども我れわ  
つこがひの別れなきもわう。何日此此緒とく。一  
何のほろある春白此さうひのう。こころのうらそ  
此れなきわらもひを化。一衆とあま。一思と  
吾のすむ。一物とあま。一思とあま。一思とあま。  
らぬ。ゆゑの事とわらふ事にあ。こころや。訓  
は出され。いふ。あま。一。ゆゑ。此此緒。女字と。清  
いと。ゆゑ。一。ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま  
一。ゆゑ。一。ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま  
へ。一。ゆゑ。一。ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま  
此此緒。女字と。ま。ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま  
て。ま。ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま。ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま  
あ。ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま。ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま  
場。ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま。ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま  
ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま。ゆゑ。こころ。此此緒。女字と。ま





こしけるよ波濤秘者れ優梅よ事とかく神守れん  
 優梅がいつく一浪とさ法もあて神おも内かくと思  
 ひりりわれも代もよう何とさたふらとせめあんと  
 さいびそのいと神とさこの鹿やかさうと神朝歌を  
 日角八宮たひらとせんといはれはるをながせやにるの  
 又二世のときたかろる事とさうとさ城郭とてあは  
 てぬんとつひとささうこれにたてた月よりあんと  
 ねがふとほぐそいりふ又此優梅是とて死しては  
 めもかさこあうて城へのびりうんとた母此うあ  
 らうとやさんそびむくたむく歌とあつたて  
 其城郭とてあつたのうあ風とつあまうとて云々







げふまやゆきいんかのもものゆきり能く佛の現ぐなひて  
むさしあふふあつたて一たらのまゝあのおりまびな  
とまうづく外連れたるついでとどの巻子とぬちをて  
ふくかんとおてそ看れち分にうけあのおがけにうくが  
ましとていひとてあつたていしゆまのまふくしりか  
とあつたれどたれど今もてそ看のまつてとていひ  
るあしとまうづもあつたてあつたれりんがくにあ  
はと今もて神のあつたれりしゆまのまふくしりか  
一あつたれがけいんれゆくしゆまのまふくしりか  
せね巻子のあつたていひとてあつたれりしゆまのまふくしりか

しとあつたれとていひとてあつたれりしゆまのまふくしりか  
ふれぬとていひとてあつたれりしゆまのまふくしりか  
部立りも乞監難よ巫覡といへりしゆまのまふくしりか  
のせなれりしゆまのまふくしりか  
海訓よ真用訓巫と仰しゆまのまふくしりか  
聖人の周易は占天文の曆教とていひしゆまのまふくしりか  
士のりしゆまのまふくしりか  
巫占と仰しゆまのまふくしりか  
あつたれりしゆまのまふくしりか  
ふれぬとていひとてあつたれりしゆまのまふくしりか  
あつたれりしゆまのまふくしりか  
あつたれりしゆまのまふくしりか



幸ふく相とて初みけりともいふる色とあるも。  
 かれは身と靈子のかりしに靈子又我々の天壤とす  
 觀と名あると又明の伴てあへりともいふる特又例  
 子明の相人をしてひて靈子と相也。おんか曰ぬが足  
 生に相ひしれど我れも相一定しとてあはしとらり  
 一とあへりとも別子靈子いかりとさればとらりて大伸莫  
 縁とす觀と名あるといふるともいふる色とあるも。  
 ありかたなりともわれ相人のさうもあへりともいふ  
 又たいともいふるともいふる色とあるも。  
 ともあへりともいふるともいふる色とあるも。  
 ありかたなりともいふるともいふる色とあるも。





⑨ 櫻井にほどなる水に一倍とてつまずきぬをいふは  
 うらむくせに理いらねとほどなる縁をさうとて理に  
 ほどぬいあきまきとあれが言ふとあまらうりたる意  
 こころあまもあまゆきとあまはあまに理もあまの  
 くらうらむとだらうらうらとねとあまらうらうらとて  
 うらむたふとあまにひらね病人あまらうらうらとて  
 けくそとていも験らうとてまきぶしよ水病を腹の病  
 病とあつとてんあまらうらうらとて病の病とあ  
 病病が病病いらとあまらうらとて病病とあまらう  
 病病と病病とあまらうらとて病病とあまらう  
 病病と病病とあまらうらとて病病とあまらう





後々のあれは其のくらしをよむくし一身體として  
おらうあくまはしむは是れももつたよむくし民がしして  
國の守りのはなとてひさびさのいふ人のしん中のやうな  
法もあつてくるまづけりてていへて命といふ  
けいめいさうていあつてたが過候さうらうたうも  
うとて一我はなとて是れはのまきさへひくものさう  
何をもしひくべしと仰るるはげうはたれがせうくた  
道とてこれいふはなとておつててこれくことめ  
しものいふとて國をよむくしもの徳候とて  
くしとていふとていふとていふとて刑のせうたれと  
天の同じいふとて國の守りももつたよむくし孔子曰

好勇疾貪乱也人而不仁疾之已甚乱也彼んを  
ゆとてのそ我うとていふとていふとていふとて  
あつていふとていふとていふとていふとていふとて  
さうとていふとていふとていふとていふとていふとて  
山脚ふらふとていふとていふとていふとていふとて  
疾之已甚乱也とていふとていふとていふとていふとて  
とあつていふとていふとていふとていふとていふとて  
小人はとていふとていふとていふとていふとていふとて  
さうとていふとていふとていふとていふとていふとて  
徳とていふとていふとていふとていふとていふとて  
くしとていふとていふとていふとていふとていふとて

下(カ)幸(ヨリ)さ(ル)ん(ル)世(セ)の(ル)ふ(レ)事(コト) 我(ワ)れ(ハ)即(トチ)信(シン)者(ヲ)主(ト)し(テ)切(キ)ら(セ)て  
 歎(ノボ)れ(ル)ん(ル)ふ(レ)事(コト) 五百(イハ)五(イハ)五(イハ)年(ネン) 我(ワ)れ(ハ)知(チ)り(テ)お(も)て(ル)人(ヲ)も(ト)て(ル)  
 と(レ)見(ミ)え(ル)風(フウ)も(ト)あ(リ)つ(テ)ん(ル)い(ハ)き(レ)入(ノ)り(テ)我(ワ)れ(ハ)家(カ)人(ト)し(テ)さ  
 ん(ル)し(テ)風(フウ)を(ト)ら(ニ)お(も)と(ス)り(テ)い(ハ)り(テ)な(ス)も(ト)て(ル)身(ミ)に(シ)ら(リ  
 て(ル)之(レ)に(シ)る(レ)い(ハ)も(ト)の(レ)事(コト) 信(シン)者(ヲ)と(シ)て(ル)ん(ル)ふ(レ)事(コト) 我(ワ)れ(ハ)お(も)て(ル)  
 け(レ)う(レ)と(シ)あ(リ)る(レ)事(コト) 我(ワ)れ(ハ)お(も)て(ル)ん(ル)ふ(レ)事(コト) 我(ワ)れ(ハ)お(も)て(ル)  
 信(シン)者(ヲ)と(シ)す(レ)る(レ)事(コト) 我(ワ)れ(ハ)お(も)て(ル)ん(ル)ふ(レ)事(コト) 我(ワ)れ(ハ)お(も)て(ル)  
 う(レ)う(レ)の(レ)事(コト) 我(ワ)れ(ハ)お(も)て(ル)ん(ル)ふ(レ)事(コト) 我(ワ)れ(ハ)お(も)て(ル)  
 う(レ)う(レ)の(レ)事(コト) 我(ワ)れ(ハ)お(も)て(ル)ん(ル)ふ(レ)事(コト) 我(ワ)れ(ハ)お(も)て(ル)

我(ワ)れ(ハ)信(シン)者(ヲ)と(シ)す(レ)る(レ)事(コト)

他我身れが今第五

- 一 一人(ヒト)に(シ)て(ル)事(コト) 我(ワ)れ(ハ)信(シン)者(ヲ)と(シ)す(レ)る(レ)事(コト)
- 二 二人(ヒト)に(シ)て(ル)事(コト)
- 三 三人(ヒト)に(シ)て(ル)事(コト)
- 四 他人(ヒト)に(シ)て(ル)事(コト) 我(ワ)れ(ハ)信(シン)者(ヲ)と(シ)す(レ)る(レ)事(コト)
- 五 一人(ヒト)に(シ)て(ル)事(コト) 我(ワ)れ(ハ)信(シン)者(ヲ)と(シ)す(レ)る(レ)事(コト)
- 六 二人(ヒト)に(シ)て(ル)事(コト) 我(ワ)れ(ハ)信(シン)者(ヲ)と(シ)す(レ)る(レ)事(コト)
- 七 三人(ヒト)に(シ)て(ル)事(コト) 我(ワ)れ(ハ)信(シン)者(ヲ)と(シ)す(レ)る(レ)事(コト)
- 八 抱(ア)り(テ)子(コ)を(シ)す(レ)る(レ)事(コト)
- 九 う(レ)う(レ)の(レ)事(コト)
- 十 道(ミチ)者(ヲ)と(シ)す(レ)る(レ)事(コト)

他我身の人才又

①世に精子種氣の未練又ハ種氣の換氣の爲せしむる  
いそぎしつる事也此事一可ふく一可ら高人の  
うへてこの事といつては常にお我身練うらう  
く身もく人の来んるはよそ人と異なるはひん  
らうしてゐるせはつる一陽氣もつらうく物あら  
のあつては身もくよそ人の事ごとくつて未練又  
換氣のたつてもは後かゝる物とていふことひて  
うらうくはの事とてこれと約するらうくはつて  
んともうくはの事とてこれと約するらうくはつて  
うらうくはの事とてこれと約するらうくはつて



く去来ばしてとあるれは何いなるも死すん  
とあるは其時うごいて我れとてうらむら  
められしうらむらとてうらむらとてうらむら  
けふ其時轉信くせしうらむらとてうらむら  
流は其とて先祖れをうらむらとてうらむら  
まるとうらむらとてうらむらとてうらむら  
これの中より燕雀何知鳴鶴志されけり  
とてうらむらとてうらむらとてうらむら  
るもれを辨信流は漢れを祖はけりて天下とて  
功より我國のありとてうらむらとてうらむら  
とてうらむらとてうらむらとてうらむら

くらとてあふはうらむらとてうらむら  
けれも我れがうらむらとてうらむら  
るもれを辨信流は漢れを祖はけりて天下とて  
うらむらとてうらむらとてうらむらとてうらむら  
圓なるはうらむらとてうらむらとてうらむら  
聖神のありとてうらむらとてうらむらとてうらむら  
うらむらとてうらむらとてうらむらとてうらむら  
成すはうらむらとてうらむらとてうらむらとてうらむら  
又一日はうらむらとてうらむらとてうらむらとてうらむら  
うらむらとてうらむらとてうらむらとてうらむら







能くもきしめられがけの物もさしつかへなくと他人乃  
とくもりつらういふ。さういふに、<sup>たか</sup>しめられたるがけもさしつかへなく  
つとめ、<sup>たか</sup>しめられたるがけもさしつかへなくと他人乃  
たけつとめられたるがけもさしつかへなくと他人乃  
たけつとめられたるがけもさしつかへなくと他人乃  
たけつとめられたるがけもさしつかへなくと他人乃  
たけつとめられたるがけもさしつかへなくと他人乃  
たけつとめられたるがけもさしつかへなくと他人乃  
たけつとめられたるがけもさしつかへなくと他人乃  
たけつとめられたるがけもさしつかへなくと他人乃  
たけつとめられたるがけもさしつかへなくと他人乃  
たけつとめられたるがけもさしつかへなくと他人乃

のまゝにありしやうの事ありけり。ゆゑに、<sup>たか</sup>しめられたるがけもさしつかへなくと他人乃  
まゝにありしやうの事ありけり。ゆゑに、<sup>たか</sup>しめられたるがけもさしつかへなくと他人乃  
まゝにありしやうの事ありけり。ゆゑに、<sup>たか</sup>しめられたるがけもさしつかへなくと他人乃  
まゝにありしやうの事ありけり。ゆゑに、<sup>たか</sup>しめられたるがけもさしつかへなくと他人乃  
まゝにありしやうの事ありけり。ゆゑに、<sup>たか</sup>しめられたるがけもさしつかへなくと他人乃  
まゝにありしやうの事ありけり。ゆゑに、<sup>たか</sup>しめられたるがけもさしつかへなくと他人乃  
まゝにありしやうの事ありけり。ゆゑに、<sup>たか</sup>しめられたるがけもさしつかへなくと他人乃  
まゝにありしやうの事ありけり。ゆゑに、<sup>たか</sup>しめられたるがけもさしつかへなくと他人乃  
まゝにありしやうの事ありけり。ゆゑに、<sup>たか</sup>しめられたるがけもさしつかへなくと他人乃  
まゝにありしやうの事ありけり。ゆゑに、<sup>たか</sup>しめられたるがけもさしつかへなくと他人乃  
まゝにありしやうの事ありけり。ゆゑに、<sup>たか</sup>しめられたるがけもさしつかへなくと他人乃

ヨメ

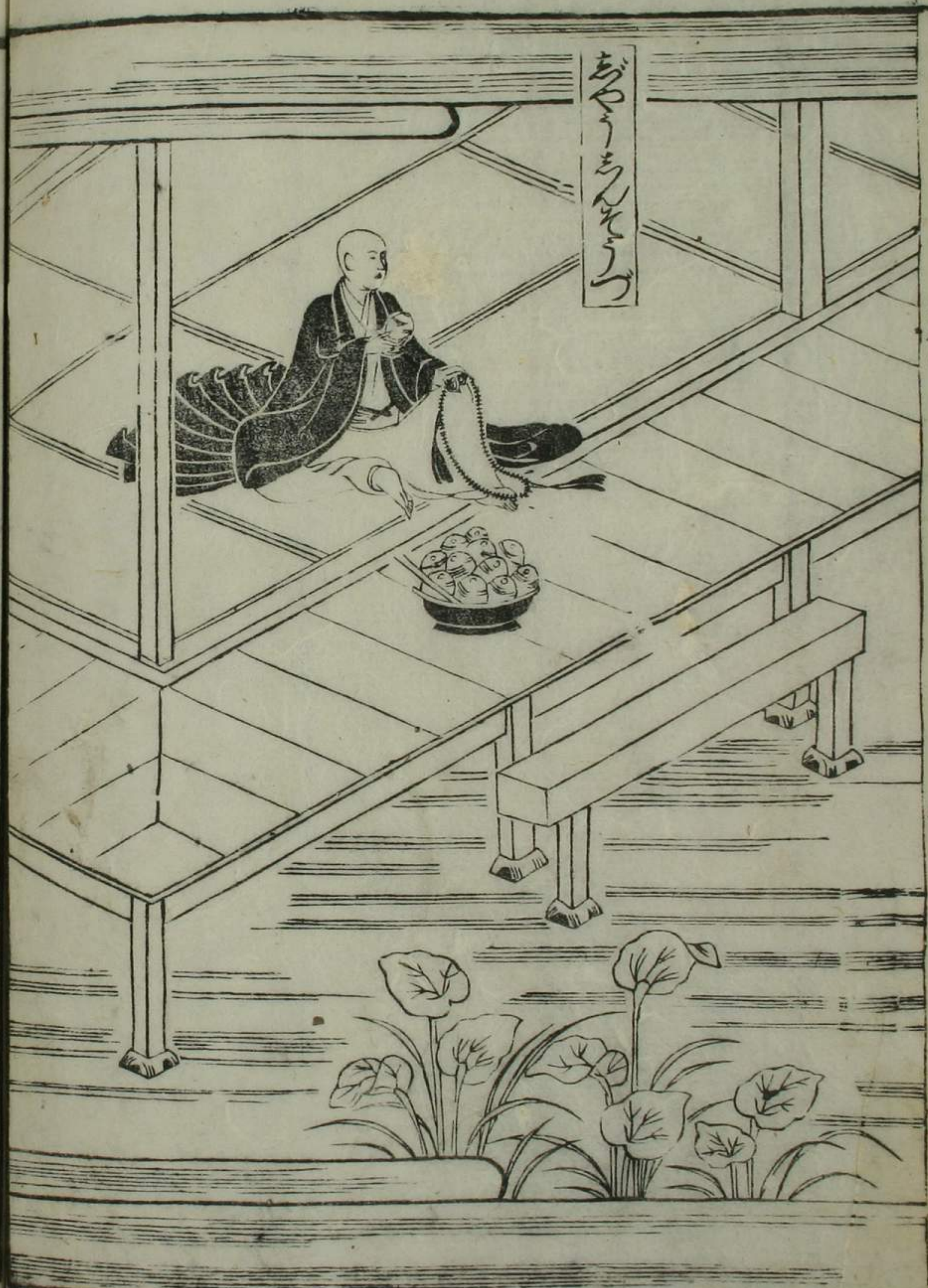
☆

ころろくいのれが<sup>ん</sup>たあされ<sup>れ</sup>る。さう<sup>に</sup>らうらうもあんな<sup>に</sup>ゆ  
 らげ<sup>の</sup>小毒<sup>を</sup>うけ<sup>ぬ</sup>たの<sup>に</sup>ら<sup>ば</sup>子<sup>れ</sup>人<sup>を</sup>多<sup>く</sup>は<sup>た</sup>積<sup>む</sup>  
 来る<sup>ら</sup>う<sup>て</sup>と<sup>れ</sup>は<sup>後</sup>念<sup>に</sup>邪魔<sup>も</sup>も<sup>う</sup>つ<sup>と</sup>れ<sup>の</sup>心<sup>実</sup>ま<sup>り</sup>  
 らぬ<sup>あ</sup>や<sup>み</sup>は<sup>た</sup>ど<sup>く</sup>い<sup>ゆ</sup>ど<sup>も</sup>あ<sup>り</sup>ぬ<sup>べ</sup>し<sup>の</sup>心<sup>か</sup>  
 ころ<sup>れ</sup>ゆ<sup>る</sup>と<sup>し</sup>た<sup>ら</sup>ば<sup>我</sup>と<sup>し</sup>ま<sup>の</sup>と<sup>た</sup>お<sup>す</sup>て<sup>ら</sup>と  
 り<sup>の</sup>丹<sup>ち</sup>り<sup>て</sup>と<sup>ぬ</sup>く<sup>不</sup>是<sup>も</sup>は<sup>香</sup>も<sup>集</sup>集<sup>の</sup>結<sup>を</sup>を<sup>れ</sup>  
 毛<sup>母</sup>舌<sup>法</sup>が<sup>び</sup>り<sup>が</sup>ら<sup>り</sup>小<sup>無</sup>我<sup>と</sup>し<sup>ま</sup>字<sup>を</sup>を<sup>ら</sup>た<sup>ら</sup>と<sup>さ</sup>  
 人<sup>の</sup>心<sup>か</sup>く<sup>ら</sup>う<sup>を</sup>原<sup>因</sup>は<sup>さ</sup>か<sup>し</sup>ま<sup>ら</sup>う<sup>つ</sup>り<sup>て</sup>た<sup>ら</sup>  
 ゆ<sup>ら</sup>と<sup>ら</sup>ゆ<sup>ら</sup>と<sup>か</sup>ら<sup>く</sup>連<sup>結</sup>し<sup>と</sup>け<sup>の</sup>小<sup>丹</sup>丹<sup>ふ</sup>し<sup>こ</sup>  
 と<sup>し</sup>居<sup>る</sup>り<sup>の</sup>丹<sup>地</sup>は<sup>空</sup>の<sup>の</sup>ひ<sup>と</sup>あ<sup>り</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>び</sup>ゆ<sup>ら</sup>  
 小<sup>至</sup>人<sup>ハ</sup>不<sup>已</sup>と<sup>し</sup>ら<sup>う</sup>文<sup>字</sup>と<sup>し</sup>て<sup>ね</sup>い<sup>の</sup>て<sup>ぬ</sup>が<sup>け</sup>  
 他<sup>ゆ</sup>ら<sup>く</sup>ち<sup>り</sup>ゆ<sup>ら</sup>。又<sup>大</sup>我<sup>れ</sup>新<sup>法</sup>小<sup>人</sup>己<sup>合</sup>と<sup>し</sup>て<sup>ら</sup>病<sup>も</sup>  
 ゆ<sup>ら</sup>ら<sup>う</sup>也<sup>と</sup>し<sup>佛</sup>去<sup>よ</sup>け<sup>れ</sup>あ<sup>り</sup>て<sup>ち</sup>子<sup>ぶ</sup>ら<sup>う</sup>は<sup>は</sup>波<sup>羅</sup>  
 密<sup>戒</sup>切<sup>も</sup>無<sup>我</sup>の<sup>二</sup>字<sup>を</sup>を<sup>ら</sup>べ<sup>し</sup>と<sup>世</sup>た<sup>ら</sup>う<sup>教</sup>と<sup>か</sup>ら<sup>ふ</sup>  
 人<sup>の</sup>あ<sup>り</sup>も<sup>も</sup>け<sup>ん</sup>我<sup>れ</sup>地<sup>後</sup>ら<sup>う</sup>ら<sup>う</sup>の<sup>あ</sup>ま<sup>べ</sup>ら<sup>う</sup>也<sup>と</sup>  
 ら<sup>ぬ</sup>も<sup>無</sup>我<sup>の</sup>心<sup>も</sup>大<sup>小</sup>を<sup>經</sup>る<sup>と</sup>長<sup>五</sup>を<sup>れ</sup>一<sup>生</sup>無<sup>我</sup>  
 と<sup>し</sup>ま<sup>ら</sup>う<sup>と</sup>ら<sup>う</sup>と<sup>れ</sup>一<sup>時</sup>も<sup>も</sup>無<sup>我</sup>と<sup>し</sup>ら<sup>う</sup>又<sup>佛</sup>と<sup>ら</sup>う<sup>も</sup>  
 無<sup>我</sup>と<sup>切</sup>よ<sup>ん</sup>佛<sup>の</sup>心<sup>ら</sup>丹<sup>ら</sup>う<sup>無</sup>我<sup>と</sup>の<sup>り</sup>て<sup>ら</sup>め<sup>も</sup>  
 け<sup>ん</sup>丹<sup>ち</sup>り<sup>て</sup>と<sup>ら</sup>う<sup>の</sup>心<sup>も</sup>無<sup>我</sup>と<sup>か</sup>ら<sup>う</sup>ひ<sup>と</sup>め<sup>し</sup>て<sup>ら</sup>  
 と<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>ら</sup>う<sup>も</sup>客<sup>と</sup>ら<sup>ん</sup>べ<sup>ら</sup>う<sup>と</sup>た<sup>ら</sup>ひ<sup>客</sup>と  
 くら<sup>う</sup>ら<sup>う</sup>も<sup>無</sup>我<sup>の</sup>見<sup>解</sup>ら<sup>れ</sup>客<sup>と</sup>と<sup>ら</sup>す<sup>ら</sup>れ<sup>も</sup>も<sup>も</sup>無  
 我<sup>の</sup>心<sup>も</sup>と<sup>ら</sup>う<sup>ら</sup>う<sup>の</sup>丹<sup>ち</sup>り<sup>て</sup>ら<sup>う</sup>無<sup>我</sup>と<sup>ら</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>也</sup>  
 七

七  
 七



あやうちんきうづ



よゝのけしひあま事とてうらもはねもは草子社柳宮に  
あゝど脚籠よ云はるまのけし傷ふかりの法有る子に  
うつら気わりとて心とちふりてあつじしふびだん  
ふふ人な賊者とてうらも聖賢のたみ安んじけり  
となのむゆつまたとてあつびてらとなのしげ  
よゝとてびふ人の社業ゆあゝまはかりたうやりや  
あゝなひむらうり地をそれいけうの第一の守り  
てとてそれともうらて是物よけりてそのよつめ  
てとてふらうり人入のうらてとてうらうりあつじ  
博学多文うらて賢人がわとて法僧佛の老翁もたう  
求り得らうとて其のほまはうらてうらびんうらひ

たぐいのりとあるはた寺にさうつそふつとてまがもさうぢくせ  
せうごいふんついで家ありれどけりせかひてかたと  
うまら海もさうぢくびふたうとさひける時いふた  
るしてさうつあつこあられざんぞよふよふとありんか一た  
ん書にひらひて見書れらうとさうつらつひ編綴れ神をつい  
あつとと声とさう入あつらうをよのちう後りうらひま  
あつちもれありとけりゆめめれ聴えと自れけりんは  
扇拍子とえう声よたうとさう丸道とたつとひと  
よれさうんいさうくもさうくさうらうよさうておん  
乃賊實れ書いさうりひとさうめく申さうとさうとさう人  
おまうこいさ我あがひが年をひんたうこれ人のいさうよ

いさうあも書いれ程程あもよ人のたうとあつひつらう  
さう書いよひらひ書とさうさうらひて賢人なれんた  
うとあつちとさうさうめ書いれのとさうそひて賢  
人いたうとあつちとさうさうのさうのゆめさうにゆ  
うとさうれとさうさういさうたれとさういさういさう  
さうのさういさう人よさうさういさうらうとさうとさう一節乃大  
いさうとさういさうさう又さうよはさうゆらとさうもとさうあ  
際圓れ老仙のあつとさういさうゆらとさういさういさう  
の事記よ書書れ字義いあへて論語孟子れ字んとりら  
るるさういさう書字いさういさういさう又さう一節字ん  
とりつてさうさういさういさういさういさういさういさういさう

んど世の文章は妙意なく一かうらんはれ世は  
 ともものしに依りて思ふにうらもさうあふ  
 らるるものなりあまの善哉よんぶすものにか  
 らるる人かおれとせしとらんやかのてい軍中  
 のあまのしあらんを同座とるべけれとひみま  
 へておれを結ぶるものなりとてふも其のあま  
 ありてい事申す東坡居士人生識字憂患始  
 するものなりとてあつての及玩世法もは  
 らるる人かおれとせしとらんやかのてい軍中  
 のあまのしあらんを同座とるべけれとひみま  
 へておれを結ぶるものなりとてふも其のあま

んど世の文章は妙意なく一かうらんはれ世は  
 ともものしに依りて思ふにうらもさうあふ  
 らるるものなりあまの善哉よんぶすものにか  
 らるる人かおれとせしとらんやかのてい軍中  
 のあまのしあらんを同座とるべけれとひみま  
 へておれを結ぶるものなりとてふも其のあま









ぬきり 続々 山 中 へ 入 り 行 け ば  
 もの 子 約 一 十 人 ぐ ぐ の 山 へ 登 上 せ ば  
 手 紙 と 一 封 づ け づ け づ け づ け づ け づ け  
 づ け づ け づ け づ け づ け づ け づ け づ け  
 る づ 森 へ 登 上 せ ば 一 十 人 ぐ ぐ の 山 へ  
 登 上 せ ば 一 十 人 ぐ ぐ の 山 へ 登 上 せ ば  
 あ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
 登 上 せ ば 一 十 人 ぐ ぐ の 山 へ 登 上 せ ば  
 一 十 人 ぐ ぐ の 山 へ 登 上 せ ば 一 十 人 ぐ ぐ  
 一 十 人 ぐ ぐ の 山 へ 登 上 せ ば 一 十 人 ぐ ぐ





とらへ八家九家其をばくふつとて人と語れ  
たのちも地とていふなりそよとていふ  
のこる海とていふなりとていふ  
ふつとていふなりとていふ  
ひびくつとていふなりとていふ  
ゆふとていふなりとていふ  
ふつとていふなりとていふ

九つとていふなりとていふ  
ふつとていふなりとていふ  
ゆふとていふなりとていふ  
ふつとていふなりとていふ  
ゆふとていふなりとていふ  
ふつとていふなりとていふ  
ゆふとていふなりとていふ

ゆふとていふなりとていふ  
ふつとていふなりとていふ  
ゆふとていふなりとていふ  
ふつとていふなりとていふ  
ゆふとていふなりとていふ  
ふつとていふなりとていふ  
ゆふとていふなりとていふ





他我身れり人第六

- 一 一はむらさきふかやうの事一はむらさきふかやうの事
- 二 二はむらさきふかやうの事一はむらさきふかやうの事
- 三 三はむらさきふかやうの事
- 四 四はむらさきふかやうの事
- 八 八はむらさきふかやうの事





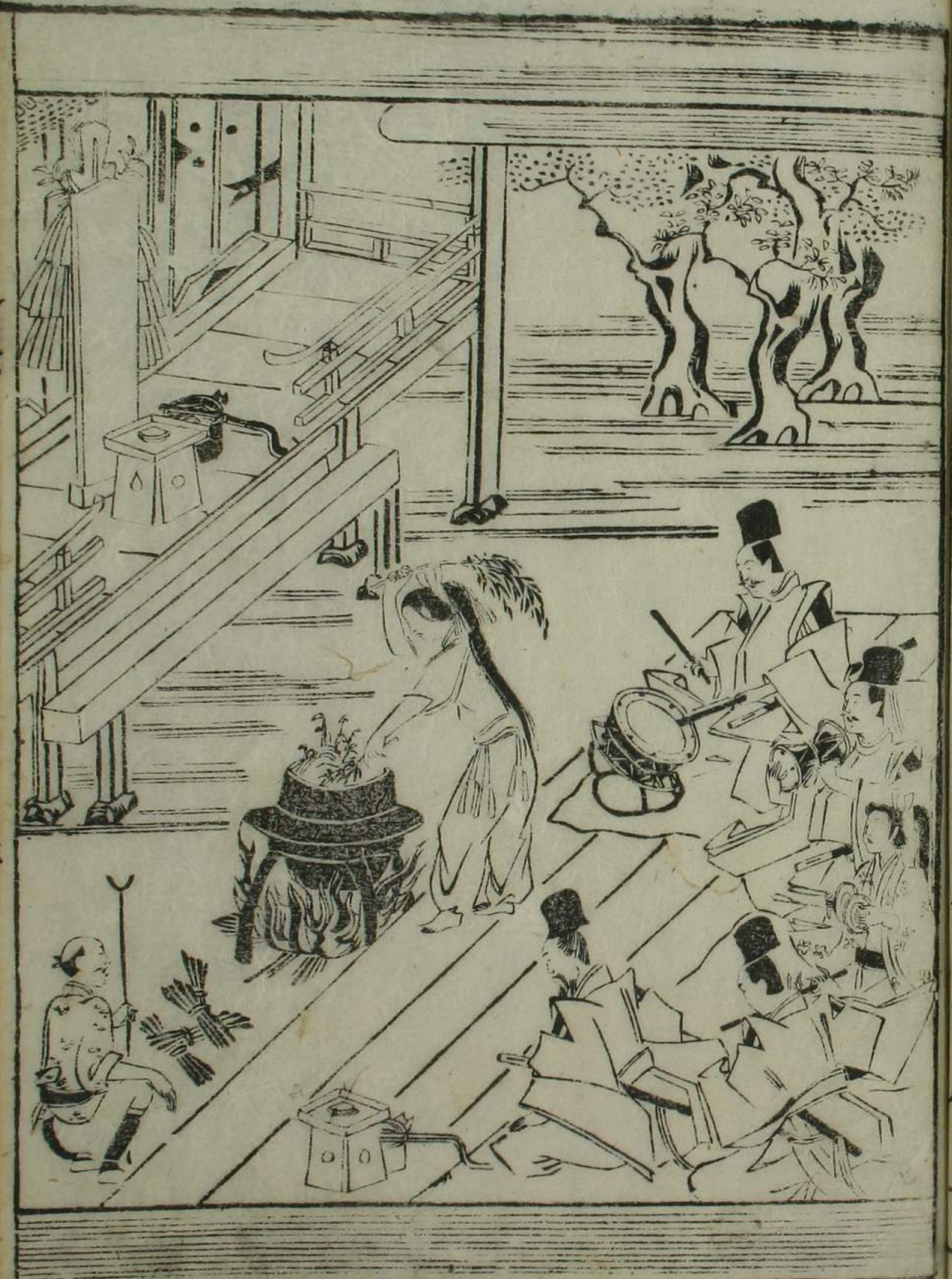


ゆれいひの...  
 あふふ...  
 や...  
 世...  
 乃...  
 情...  
 一...  
 く...  
 一...  
 中...









まぐて天照を御のまぐいしがあゆみのいなるむら  
りてび社となしむすうりよまふしなれども社とすう  
よ守りあふんさしんが持たれん社をたれんとすう  
てめりゆるべさしんが社をたれんとすう  
れみあゆんゆりゆりあふんさしんが社をたれんとすう  
まぐてあゆみのまぐいしがあゆみのいなるむら  
りてび社となしむすうりよまふしなれども社とすう  
よ守りあふんさしんが持たれん社をたれんとすう  
てめりゆるべさしんが社をたれんとすう  
れみあゆんゆりゆりあふんさしんが社をたれんとすう  
まぐてあゆみのまぐいしがあゆみのいなるむら  
りてび社となしむすうりよまふしなれども社とすう  
よ守りあふんさしんが持たれん社をたれんとすう  
てめりゆるべさしんが社をたれんとすう  
れみあゆんゆりゆりあふんさしんが社をたれんとすう  
まぐてあゆみのまぐいしがあゆみのいなるむら  
りてび社となしむすうりよまふしなれども社とすう  
よ守りあふんさしんが持たれん社をたれんとすう  
てめりゆるべさしんが社をたれんとすう  
れみあゆんゆりゆりあふんさしんが社をたれんとすう









そふくづまろく人高海じえとこらひでひびりりりね  
うりししくさるり又儒者なりは法と云き一だく  
野られがく彼を新尺かの所へ法権するまは又言ふ  
よの拾うやと無欲より一一切を重とらむるとま  
ごうよめうて海よこのふすぞ佛と云れやんひら  
うそふえなれしゆてもはたふみ信と云られつへ  
まごうくしんからう儒道と信と信と云うやえ合  
と云しそ信をされがうが信と申すも儒と云つ  
ふらひりられをふえやとて人のうつがまのむ  
らめらうてあまはあやとてのふたははらひ  
とありとこと云はれあはれはれと衆のらひひらと  
とふまがくつつとてふ病をうと佛と云ふのこの  
らぬものらひひり定業非業のうとゆめらうりか  
りたくれれどもつして人の心をうすむるれは細  
法ると云ふはういひらぬいふあまうとんとまづ  
とさゆるみらのに信を信法と云ふられはあはに  
とつとゆるて自他是能法依もめけいふは法の  
やごあつらもされぬ法の親愛母のむみかご  
て過少法を重とひてまへの法は石らうこむらひ  
法まはらんとてとてらうとてまごこのやなま  
ゆふんとらうとてまごのやあぬのて買しうとて佛は師の

そふくづまろく人高海じえとこらひでひびりりりね  
うりししくさるり又儒者なりは法と云き一だく  
野られがく彼を新尺かの所へ法権するまは又言ふ  
よの拾うやと無欲より一一切を重とらむるとま  
ごうよめうて海よこのふすぞ佛と云れやんひら  
うそふえなれしゆてもはたふみ信と云られつへ  
まごうくしんからう儒道と信と信と云うやえ合  
と云しそ信をされがうが信と申すも儒と云つ  
ふらひりられをふえやとて人のうつがまのむ  
らめらうてあまはあやとてのふたははらひ  
とありとこと云はれあはれはれと衆のらひひらと  
とふまがくつつとてふ病をうと佛と云ふのこの  
らぬものらひひり定業非業のうとゆめらうりか  
りたくれれどもつして人の心をうすむるれは細  
法ると云ふはういひらぬいふあまうとんとまづ  
とさゆるみらのに信を信法と云ふられはあはに  
とつとゆるて自他是能法依もめけいふは法の  
やごあつらもされぬ法の親愛母のむみかご  
て過少法を重とひてまへの法は石らうこむらひ  
法まはらんとてとてらうとてまごこのやなま  
ゆふんとらうとてまごのやあぬのて買しうとて佛は師の



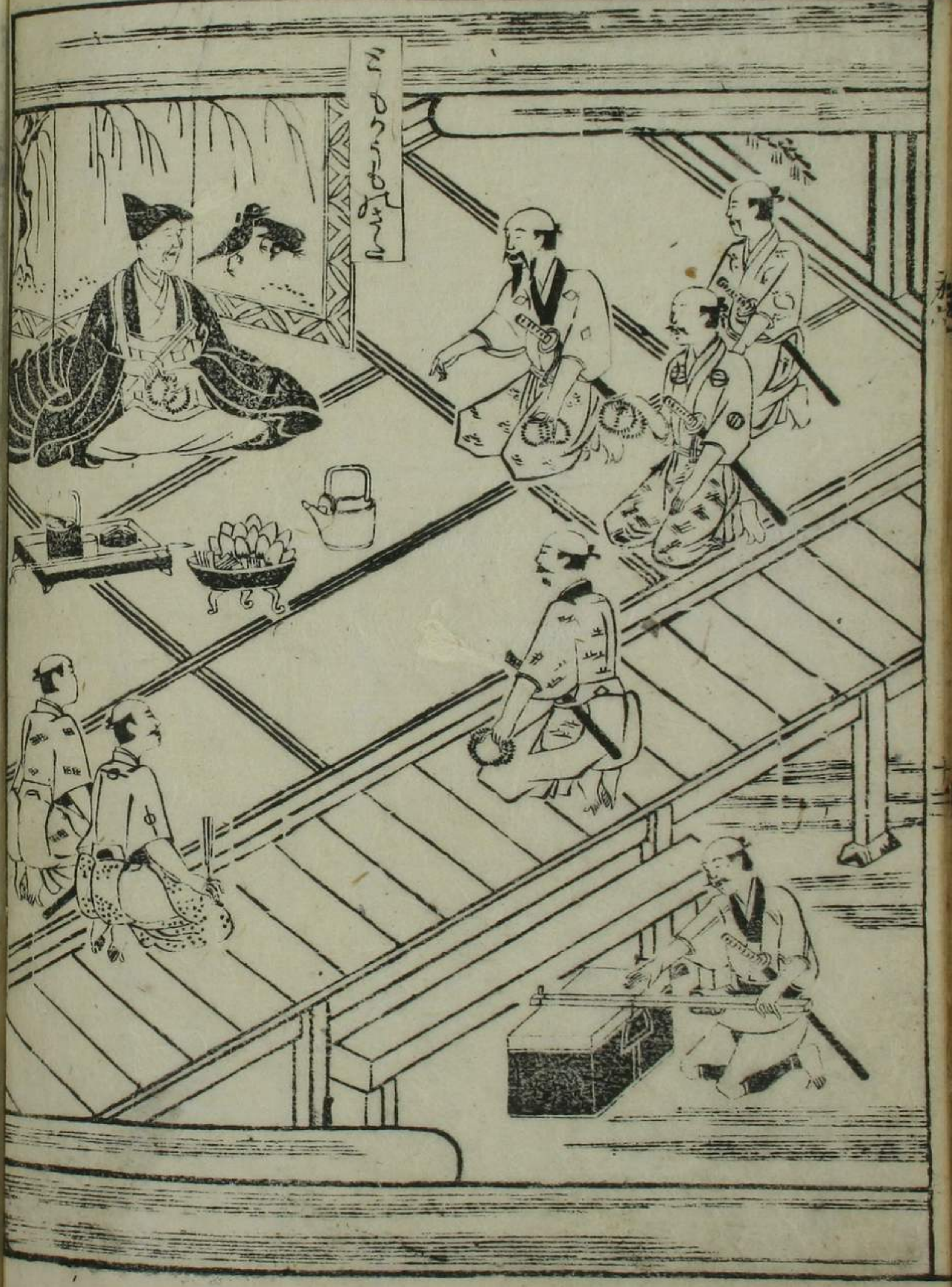


うりてあつてみまごの四象れあつてまうとてあつてこれにび  
 強あつてはひつふふとくつなうらんやうとひつてはつたに  
 うりてあつて我をくらわれゆかろゆもつてあつてあつて  
 ものいよむれをひつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 不愚のうりてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 くんれあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 ろくくんれあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 とてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 もあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 一いつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

④ 一く物とて... 研はうして... 廣大無窮なる事... 服部... 研はうして... 廣大無窮なる事... 服部... 研はうして... 廣大無窮なる事... 服部...

服部... 研はうして... 廣大無窮なる事... 服部... 研はうして... 廣大無窮なる事... 服部... 研はうして... 廣大無窮なる事... 服部...

こゝろもろくゆるけだれで恍惚とわも知事より其事一す  
 一のこゝろわりて我れをえきしびりも宗此長老を  
 一切纏とも帯にけりたあやとさうゆればどむねよづ  
 一ゆづいさうあまよりさうりてさうも四等へけしひと  
 一かきいばさうも求量ししんもまをいぞむむる  
 一さうりぬれとさうもかんと地よけは十念をどゆりて  
 一さうのゆは件のさうもわいしれとさうかさうも  
 一ゆえりゆるがけさうもあさくせあさくせんをだ  
 一まえりゆりゆらもゆらさうもいゆりさうもゆり  
 一長老さうりのわらぶさうしてさうもいしえりゆら  
 一ぬらむらり宗ゆは二ふ年一ゆらさうもさうもいしえり







りあひだりて...  
 か...  
 や...  
 り...  
 い...  
 り...  
 ひ...  
 ち...





正徳十三年申正月吉辰  
 秋田屋平  
 治陽教人山景元隣抱甕教とてつらつらひあつて  
 いらつてあつて甘きうとれだか人さうけつらつらひあつて  
 されどもほろおれ人さうとてつらつらひあつて  
 とらつて人さうけつらつらひあつてつらつらひあつて  
 人と君つげつらつらひあつて

正徳十三年申正月吉辰  
 秋田屋平

正徳十三年  
 秋田屋平

幸堂  
 私印

正徳十三年  
 秋田屋平

